

## 後藤点に至るまでの訓読の歴史について

石川 洋子

はじめに

本稿は、平成二十八年十一月二十日（日）に、サンクリスタル高松3階の視聴覚ホールにおいて開催された講演会での筆者の講演「後藤点について——訓読のお話です——」に基づいて、今回新たに加筆修正したものである。この講演会は、高松市歴史資料館の第七十二回企画展である「片山冲堂生誕二〇〇年記念『高松藩校講道館——後藤芝山から片山冲堂まで——』の関連イベントとして開催された。この企画展は、高松市歴史資料館 企画展示室（サンクリスタル高松4階）で行われ、展示期間は、平成二十八年十一月五日（土）から十二月十八日（日）であった。

この企画展に先立ち、図録として『高松藩校講道館』が刊行され、そこに、拙著「後藤点について」<sup>①</sup>を寄せた。

後藤点についての詳細はそちらをご覧ください。

本稿はタイトルを「後藤点に至るまでの訓読の歴史について」とした。

第一章は、訓読というものを「日本」という単語レベルで考察した。日本古来の「やまとことば」が、漢字伝来以来どのような影響を受け、また、日本語の音韻の変化によりどのようにそれが変遷したかを国号「日本」という単語で考察したものである。

第二章は、訓読というものの意味、意義を考察する上で重要と思われる、古井由吉氏の「日本語ほどバイリンガルな言葉はない」という意見を紹介した。

第三章は、『論語』の訓読の歴史について、先覚に学恩を賜りながら研究し、浅学菲才の筆者がようやくまとめた拙著『近世における『論語』の訓読に関する研究』(JSPS 科研費 265074 の助成を受けた<sup>2)</sup>)で詳しく論じたものを基にまとめたものである。

## 第一章 国号「日本」について

古代の日本語、つまり、日本語固有の言葉は「やまとことば」と呼ばれる。その「やまとことば」で、日本のこととは「やまと」、「おおやまと」と呼ばれていた。

三世紀に編纂された中国の「魏志倭人伝」（正史『三国志』の「魏書烏丸鮮卑東夷倭人条」の通称。三世紀前半における邪馬台国等の地理・風俗・社会・外交等を記した最古のもの）で、我が国をさして「倭」と記したので、「倭（やまと）」「大倭（おおやまと）」の漢字が当てられた。

六五六年に成立した中国の『隋書』の「倭国伝大業三年条」に、聖徳太子が隋の煬帝に「日出処天子致書日没処天子（日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す）」で始まる国書を送り、煬帝の不興を買ったとある。

「日本」という国号は、七世紀半ばから八世紀にかけて成立したと言われる。聖徳太子の国書に「日出づる処」、つまり、日の出るところは「東方」であることは意識されているが、この東方が意味する「ひのもと（日の本）」を、漢字で「日本」と記すようになる。それを初めは和語で「やまと」と読んでいた。「日本（やまと）」と読んでいたものが、次第に音読みされるようになるのである。

「日」の漢字音は、呉音「ニチ」、漢音「ジツ」であり、「本」の漢字音は、呉音・漢音ともに「ホン」である。したがって、「日本」の漢字音（音読み）は、呉音「ニチホン」に基づいているといえる。

「日本」の発音については、現在「ニホン」、「ニッポン」と二種類の読み方があるが、この二種類の発音に至るまでの変遷について、「日」の漢字音の促音表記と、「本」の漢字音のハ行子音の発音の変遷について、次に考察してゆく。

「日」の漢字音は、「仏、物、別、八、雪、術、越」などと同じく、「ㄷ」で終わる人声字である。このㄷ人声字は、和語（やまとことば）の音韻体系には無い発音だったので、無表記か、母音を付けて、チ（ti）・ツ（tu）で

受け入れたのである。

現在、和語も漢語も促音は「ツ」と表記されるが、「ツ」表記が促音表記の首座を占めるのは、中世以降である。中世以前は、「にき（日記）、もて（持て）、<sup>アヤマテ</sup> 謬」のように無表記、また「ずちなし（術なし）、<sup>ゴチゴ</sup> 越後」のように「チ」表記、「仏」のように「ツ」表記のように表記する。

次に「本」のハ行子音の発音の問題である。奈良時代では、ハ行音はF音であったという意見も多いが、ハ行音は、フ（fu）以外はp音だったという説に従うと、は [pa]、ひ [pi]、ひ<sub>2</sub> [pi]、ふ [Fu]、へ [pei]、へ<sub>2</sub> [pai]、ほ [po] という発音になる。従って「日本」の奈良時代以前の発音は [nitpon] であった。

平安時代にハ行子音の発音が、p音からF音に変化する。したがって、平安時代の「日本」の発音は、奈良時代以前からの発音「ニッポン [nitpon]」の継承と、平安時代の発音「ニホン [niHon]」が併存することになる。「ニホン [niHon]」という発音は、和語として発音しやすくするために、「日」の「フ」が脱落したからか、また、「ニホン」という促音無表記という表記の影響からかは明らかではないが、「ニホン [niHon]」という発音になったと考えられる。

室町時代、『日葡辞書』には、「Nippou」、「Nifou」、「Ippou (ジッポン)」と三種類ある。「Ippou (ジッポン)」とあるのは、印刷機が大文字「J」を欠いていたため「I」で代用しているためである。「Ippou (ジッポン)」は、漢音である。現在、英語で日本は「Japan」と呼ばれるが、これは漢音の影響からであろうか。

ハ行子音の発音が、F音であったことは、室町時代の日本で最初のなぞなぞ集「後奈良院御撰何曾」に、「母には二たびあひたれども父には一度もあはず」の答えが「くちびる」ということでよく知られている。

ハ行子音の発音が、F音からh音に変化したのは、江戸時代前期の頃である。「日本」の発音は「niFon」から「nihon」となる。江戸時代前期から現代と同じ「ニホン」という発音になるのである。もちろん、奈良時代以前の発音「ニッポン」も継承し、「日本」の読み方は二種類ある。

以上の考察から、仏書などの漢文訓読は奈良時代頃すでに行われていたと言われるが、「日本」などの単語レベルで見れば、漢字の訓読の工夫は、さらに時代はさかのぼって行われていたことが分かるのである。

余分なことであるが、国号「日本」の読み方は、二〇〇九（平成二十一）年、麻生太郎首相の時に初めて閣議決定された。民主党の岩國哲人衆議院議員の質問主意書「今後、『日本』の訓み方を統一する意向はあるか」との問に対し、答弁書は「『ニッポン』『ニホン』という訓み方についてはいずれも広く通用しており、どちらか一方に統一する必要はない」としたのである。つまり、現在、正式な国の呼称は「ニホン」でも「ニッポン」でも正しいとされている。

## 第二章 「日本語ほどバイリンガルな言葉はない」

「日本語ほどバイリンガルな言葉はない」という言葉が、古井由吉「言葉について」（『中学生からの大学講義

2 『考える方法』 ちくまプリマー新書 二〇二頁)にある。古井由吉氏は、一九三七(昭和十二)年十一月十九日生まれの日本の小説家、ドイツ文学者である。

「日本語ほどバイリンガルな言葉はない」という引用文のある文章の内容を、以下概略する。

「世界で一番わかりにくいのは、日本語とアラビア語だ」と外国人はこんなふうに文句を言うらしい。

実は、日本以外の世界に住んでいるあらかたの人々はバイリンガルだとも言えます。一つに限らずいろいろな言語を話せることが多い。同じように、どの国でもたいてい二カ国語くらいは通用することが多い。

それに引き換え、日本人はモノリンガルだといえるでしょう。日本語以外の言語が通用する地域というのは、まずありえないからです。だが、私は、逆に「日本語ほどバイリンガルな言葉はないのかもしれない」と思うのです。

日本語には「かな」と「漢字」があります。この二つは、姿も言語体系もまったく異なっています。「かな」から「漢字」へ、「漢字」から「かな」へ、私たち日本人はそのひとつひとつの切り替えを、読むときばかりでなく話すときも瞬時にこなしているんです。パソコンだったらこの交換を機械がやってくれるわけだけれど、日常的なやりとりではそうはいかない。その膨大な量の変換を常に頭の中で行うことになる。

こんなふうに、「かな」と「漢字」という、まったく異なった姿のものを同時に使いこなしてきたのが、日本人の特殊性であり特徴ともいえるでしょう。

(傍線、石川)

以上が概略である。右の文章中にある「かな」は「やまとことば」であり、「漢字」は「古典中国語」と言い換えられると思う。やまとことばである和語と古典中国語を当然の如く駆使している日本人は、誠にバイリンガルである。古井氏の言う「日本語ほどバイリンガルな言葉はない」という表現は、筆者にとり大変新鮮であった。かつ、かなと漢字、引いては古典と漢文を、漢字が伝来されて以降、必然的に学ぶことになったこと、それは日本人の宿命であることを、これまで論じたことがあり、古井氏の意見に大いに首肯するところである。

### 第三章 後藤点に至るまでの『論語』の訓読について

#### 第一節 『論語』の「古注」と「新注」

『論語』の解釈は、大きく分けると、「古注」と「新注」に分けられる。

「新注」とは十二世紀に朱熹（尊んで朱子と呼ぶ。一一三〇～一二〇〇）によって書かれた『論語集注』を指す。「古注」とは、それ以前の注釈書を指す。三世紀に何晏（一九〇～二四〇）らによってまとめられた『論語集解』、

また、六朝梁（五〇二～五五七）時代、皇侃（四八八～五四五）が書いた『論語』の注釈書で、何晏らの古注の基礎の上に、さらに解釈を発展させた『論語義疏』を指す。

『論語義疏』は十二世紀終わり頃、南宋の時代に、中国では亡逸してしまった書である。日本の足利学校にこの書の写本があり、江戸時代に根本武夷がそれを翻刻し、それが中国に逆輸入され、中国が驚喜したという。

後藤点に至るまでの訓読の歴史について

日本では、平安時代から室町時代にかけて、古注に従って読まれてきた。しかし、室町時代に新注が日本に伝えられ、江戸時代に朱子学が幕府の国学とされ、新注が標準的解釈となった。

## 第二節 『論語』の訓読の歴史

『論語』は『古事記』によると、応神天皇の御代（五世紀頃）に王仁により、百済からもたらされた。『日本書紀』によると、応神天皇の太子の菟道稚郎子は王仁から『論語』を学ぶとある。このころから『論語』は読み継がれて来ているのであるが、『論語』の訓読がいつ頃始まったかという点、平安時代には訓読されていたことが分かっている。

奈良時代には、大学寮において、『論語』と『孝経』を必修としていた「本科」は、平安時代には「明経道」と呼ばれるようになり、「明経博士」（清原家と中原家）の師資相承となる。博士家の古注による両博士家の訓読は秘伝であった。

室町時代には、朱子の『論語集注』が伝わり、五山の禅僧が新注の訓読を始める。ここで、古注と新注の訓読が互いに影響しあうようになる。

江戸時代には、漢学が盛んになり、朱子学派、古義学派、古文辞学派、折衷学派の漢学者による種々の訓読が出現する。江戸時代を三期に分けてその訓読法をまとめると、次の通りである。

初期く文之点、道春点、石斎点



中期～山崎嘉点、古義点、惕齋点、春台点、三平点

後期～永日堂点、後藤点、山子点、冢田点

### 第三節 後藤点の特徴について

江戸時代、多士済々の訓読法がある中で、道春点、春台点、後藤点は、それぞれ重要な役割を担った訓読法である。次の通りである。

道春点（林羅山 一五八三～一六五七）

林家の始祖、林羅山の考案した訓読法として、江戸時代初期から中期にかけて、最も権威のあった訓読法。

春台点（太宰春台 一六八〇～一七四七）

太宰春台は古文辞学を創設した荻生徂徠の高弟。春台は一七二八（享保十三）年に、自らの訓読法について著わした『倭読要領』を刊行。それ以後の訓読法に大きな影響を与えた人物。

後藤点（後藤芝山 一七二一～一七八二）

高松藩校の講道館初代総裁である後藤芝山が考案した訓読法。それまで権威のあった道春点に代わって、江戸時代後期から明治期に至るまで広く一般に行なわれるようになった訓読法。

後藤点に至るまでの訓読の歴史について

次に、この三種の訓読法を比較し、後藤点の特徴について考察する。それに用いた資料は次の通りである。

- 1、道春点 『四書集註』 寛文四（一六六四）年刊 内閣文庫・国立公文書館所蔵
- 2、春台点 『論語古訓正文』 宝暦四（一七五四）年刊 青淵文庫・東京都立中央図書館所蔵
- 3、後藤点 『改正四書集註』 寛政六（一七九四）年刊 東洋大学図書館所蔵

右の三種の資料について、『論語』の「学而第一」、「先進第十一」、「堯曰第二十」を全文比較した。

以下、①から④の下は、『論語』の原漢文である。原漢文の下の「」内は、『論語』の篇・章を示す。『論語』の篇・章は、岩波文庫の金谷治訳注『論語』による。

(1) 体言止め

① 柴也愚。參也魯。師也辟。由也喭。〔二一・一八〕

道春点 柴也愚。參也魯。師也辟。由也喭。

春台点 柴也愚。參也魯。師也辟。由也喭。

後藤点 柴也愚。參也魯。師也辟。由也喭。

右の用例は、道春点は「愚ナリ」、「魯ナリ」、「辟ナリ」、「嗔ナリ」と訓ずるが、春台点、後藤点は、「愚」、「魯」、「辟」、「嗔」と体言止めで訓ずる。

道春点は、古来の国語法により「ナリ」等を補読して、文末を体言で止めることはほとんどない。体言止めが出現したのは春台点からである。

(2) 音読み

② 不幸 短 命 死 矣。〔一一・七〕

道春点 不幸 短 命ニシテ 死ヌ 矣。

春台点 不幸 短 命ニシテ 死セリ 矣。

後藤点 不幸 短 命ニシテ 死ス 矣。

右の用例は、道春点では「死ヌ」とナ変の動詞に和語で訓ずる。春台点は、漢語サ変動詞「死ス」に完了の助動詞「リ」を補読して「死セリ」と訓ずる。後藤点は、「死ス」と漢語サ変動詞のみで訓ずる。

(3) 読み添えの語(補読語)

a 完了の助動詞「ツ」

③ 信 近 於 義 言 可 復 也。〔一・一三〕

道春点 信 近<sup>トキハ</sup> 於<sup>ニ</sup> 義<sup>ニコト</sup> 言<sup>シ</sup> 可<sup>レ</sup> 復<sup>シ</sup> 也<sup>フムツ</sup>。

春台点 信 近<sup>シ</sup> 於<sup>ニ</sup> 義<sup>ニコト</sup> 言<sup>シ</sup> 可<sup>レ</sup> 復<sup>シ</sup> 也<sup>キナリリス</sup>。

後藤点 信 近<sup>ツケハ</sup> 於<sup>ニ</sup> 義<sup>ニコト</sup> 言<sup>シ</sup> 可<sup>レ</sup> 復<sup>シ</sup> 也<sup>ズ</sup>。

右の用例は、道春点では「フムツ」と訓じ、後藤点では「フム」と訓読みする。道春点で読み添えていた完了の助動詞「ツ」は、後藤点では使用しない。春台点は音読符があるので「復ス」と漢語サ変動詞で音読みする。

b 「ト云」、過去の助動詞「キ」、完了の助動詞「リ」

④ 有 顔 回 者 好 學。〔一・一七〕

道春点 有<sup>リキ</sup> 顔<sup>ニ</sup> 回<sup>ト云</sup> 者<sup>ノ</sup> 好<sup>レ</sup> 學<sup>ム</sup>。

春台点 有<sup>ニ</sup> 顔<sup>ニ</sup> 回<sup>ナル</sup> 者<sup>一</sup> 好<sup>メリ</sup> 學<sup>ヲ</sup>。

後藤点 有<sup>リ</sup> 顔<sup>ナル</sup> 回<sup>者</sup> 好<sup>ム</sup> 學<sup>ヲ</sup>。

右の用例は、道春点では「顔回ト云者ノ有リキ」と訓じて、「ト云」と、過去の助動詞「キ」を補読する。春台点、後藤点では「顔回ナル者有リ」と訓じて、「ト云」に換えて助動詞「ナル」を使用し、過去の助動詞「キ」は使用しない。用例の後半部では、道春点と後藤点は「好ム」と訓ずるが、春台点は、完了の助動詞「リ」を読み添えて「好メリ」とする。

後藤点の特徴は、江戸時代初期の道春点が、完了の助動詞「ツ」や「ト云」という補読語を補うなど、煩雑に過ぎるのを簡潔にしたところにある。しかし、右の用例には示さなかったが、道春点からも「而」を逆接に読むことや、「フツクム」という古語や、「使」を再読文字として扱うことを踏襲している部分がある。

また、後藤点に先行し、革新的な訓法と言われている春台点が、従来の訓読を簡潔にしたところに、後藤点は大きな影響を受けている。しかし、「死セリ」、「好メリ」と補読語が多い春台点よりも、後藤点は「死ス」、「好ム」と、より簡略に訓読する。

後藤点は、道春点とも春台点とも相違している訓法である。道春点と春台点どちらからも大きな影響を受けながらも、独自の訓法を確立した訓法である。後藤点がこれ以降、明治期に至るまで一般に流行したのは、寛政の改革で活躍した芝山の愛弟子、柴野栗山の推薦により「林家正本」という権威を得たということもあつたであろうが、

当時の人々に、時代に合った言葉を用いた新しい訓読法として、後藤点は受け入れられたといえるであろう。

#### 第四節 後藤点と「寛政異学の禁」

先述したが、「後藤点」とは、後藤芝山が考案した訓読法のこと、芝山は『五経』・『四書』・『小学』にその訓読法による訓点（返り点・送り仮名・句読点・その他の符号を総称したものを「訓点」と言う）を加えた。

後藤点を付刻した『五経標註』は、芝山没後五年の天明七（一七八七）年に、芝山の長男である黙齋（名は師周、字は元茂、元茂は号とも）により刊行され、同じく『四書集註』は、芝山没後十三年の寛政六（一七九四）年に、同じく黙齋の手で刊行された。

これまで、後藤点を『論語』（『四書集註』）で論じてきたが、後藤点の人々に人気を博した初めのものは、『五経標註』であった。阿河準三氏の『後藤芝山 附宮詩百首』（一四四ページ）<sup>4</sup>によると、柴野碧海が撰した「後藤元茂墓表」に、「芝山先生の五経に至りて、始めて音註を掲げて、以てその首めに標す。」という特徴により、「読者、甚だ之を便とす。」とあり、後藤点は「遂に天下に遍」く流行したとある。つまり、後藤点の流行は、芝山没後五年、寛政異学の禁が出される以前であった。

その当時のことを年表にまとめると次の通りである。

天明二（一七八二）年 芝山、没。六十二歳（数え年）。

天明七（一七八七）年 後藤点『五経標註』刊行。

寛政二（一七九〇）年 「寛政異学の禁」が出される。

寛政四（一七九二）年 幕府が、学問吟味、素読吟味の試験制度を始める。

寛政六（一七九四）年 後藤点『四書集註』刊行。

寛政九（一七九七）年 聖堂および林家の家塾は、幕府直轄の昌平坂学問所（昌平黌）となる。

橋本昭彦氏の「湯島聖堂の歩み<sup>⑤</sup>」によると、寛政九（一七九七）年に成立した昌平坂学問所での教材は、初学者は『小学』・『孝経』から学び始め、『大学』・『中庸』・『論語』・『孟子』などの『四書』、次に『五経』へと進み、四書五経とならんで、『漢書』・『後漢書』などの中国の歴史書、それに漢詩などを学ぶとある。このとき「林家正本」として使用された四書五経などのテキストが後藤点である。

芝山自身は自分の訓読法がこんなに流行することなどつゆ知らず安らかに眠りにつき、後藤点は「林家正本」となる以前から読者に好評を博していたことが分かるのである。

## 終わりに

「後藤点に至るまでの訓読の歴史について」と題して論じた。

第一章は、仏書などの漢文訓読は奈良時代頃すで行われており、漢籍である『論語』の訓読は平安時代に行われたと言われるが、やまとことばである「やまと」と漢字表記された「日本」などの単語レベルで見れば、漢字の訓読の工夫は、さらに時代は遡って行われていたことを述べた。

第二章は、古井由吉氏の「日本語ほどバイリンガルな言葉はない」という言葉を紹介しながら、日本語は「かな」と「漢字」というまったく体系の異なる言語を学ぶことを宿命づけられていることを述べた。

第三章は、『論語』の訓読の歴史、及び、後藤点の特徴、後藤点と寛政異学の禁との関係について述べた。後藤点の特徴は、江戸時代初期の道春点が煩雑に過ぎるのを体言止めや、音読などにより簡潔にしたところにある。しかし、道春点からも踏襲しているところも多い。また、後藤点に先行し、革新的な訓法と言われている春台点だが、従来の訓読を簡潔にしたところに、後藤点は大きな影響を受けている。体言止め然り、音読然りである。しかし、補読語が多い春台点よりも、後藤点はより簡潔になる。

後藤点は、道春点とも春台点とも相違している訓法である。道春点と春台点、どちらからも大きな影響を受けながらも、独自の訓法を確立した訓法である。後藤点がこれ以降、明治期に至るまで一般に流行したのは、寛政の改革で活躍した芝山の愛弟子、柴野栗山の推薦により「林家正本」という権威を得たということもあつたであろうが、それ以上に、当時の人々に、時代に合った言葉を用いた新しい訓読法として、後藤点は受け入れられたといえるであろうことを述べた。



〔注〕

- (1) 石川洋子「後藤点について」(図録『高松藩校講道館』所収) 後藤芝山先生顕彰会 平成二十八(二〇一六)年十一月
- (2) 石川洋子「近世における『論語』の訓読に関する研究」新典社研究叢書268 平成二十七(二〇一五)年二月
- (3) 石川洋子「美しい日本語とは」(『同朋大学論叢』第七十七号) 平成十(一九九八)年三月  
石川洋子「日本語の宿命——明和期の宣長からの再考——」(『同朋文化』第四号〈通巻三十七号〉) 平成二十一(二〇〇九)年三月
- (4) 阿河準三『後藤芝山 附 宮詞百首』後藤芝山先生顕彰会 昭和五十七(一九八二)年四月(後藤芝山二百年祭記念出版 限定版) 今回使用したのは、平成十八(二〇〇六)年九月(復刻版)による。
- (5) 橋本昭彦「湯島聖堂の歩み」(西山松之助監修、橋本昭彦協力、内山知也・本田哲夫編『湯島聖堂と江戸時代』(『江戸は日本人を作った 湯島聖堂三百年記念展』図録) 斯文会 平成二(一九九〇)年八月

〔参考文献〕

影山輝國『『論語』と孔子の生涯』中央公論新社(中公叢書) 平成二十八(二〇一六)年三月